みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

情報通信技術との共生の時代における身体技法論の更新＜共同研究：テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-10-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平田, 晶子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009592

情報通信技術との共生の時代における身体技法論の更新

文　平田 晶子

本共同研究が3月に終了した2020年は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の脅威に直面することから始まり、共同研究のメンバーの研究・教育活動のあり方においてもオンライン化によって情報通信技術（以下、ICT）問題が一気に顕在化した。講義科目への対応では、黒板やチョークの使用がなくなり、パソコンの画面越しに教員と学生のコミュニケーションが続けられている。フィールドのインフォーマントへの聞き取り調査も、オンライン・コミュニティやSNSを介して発信される情報を手掛かりにして実施するなど、未曽有の事態となった。もはやICTの利用なしに教育・研究活動が遂行しにくくなっている今、既存の身体技法論においてどのような問いを立てることができるだろうか。

本共同研究の目的は、マルセル・モース（1976）以来の身体技法論が対象としてきた伝承や実践の場における身体動作や振る舞いなどに加えて、当時は存在していなかったICTに囲まれたデジタル環境における様相にまで対象を広げ、身体技法の事例に関する民族誌を比較研究することである。

テクノロジーをめぐる脅威論・悲観論を乗り越えて

20世紀前半、テクノロジーと人間の共生社会について考えるサイバネクティクス領域では、テクノロジーは、人間の仕事の負荷を軽減する救済者であると同時に、人間の労働の機会を奪い、さらにいえば人間の生存を脅かすものとして描かれてきた。情報学者の知見によれば、近年急速な勢いで進化を遂げているAI（人工知能）が人知を超越し、AI搭載機械による生産の増強によって人間の労働が削減されてしまうという議論が多い（Brynjolfsson and McAfee 2011）。しかし、人間とテクノロジーとの関係を脅威論でのみ捉えていては、テクノロジーとの共生社会を正確に理解できない。

芸能の公演契約にスマートフォンが活用されることもある（2015年9月5日、タイ・マハーサラカーム県ヤムイモ畑、平田晶子撮影）。

20世紀半ば、フランスの先史学者・社会文化人類学者ルロア・グーランは、人間の動作や言語の機械化に着目し、人間の能力が機械によって拡張される状況を「技術の外化」として論じた（Leroi-Gourhan 1964）。この視点は、日常生活においてICTが浸透した今日においても十分に援用することができる。むしろ、機械化や工業化が進展した現代社会だからこそ、身体から切り離された技術の外化という状況を相対化する作業を通して、改めて我々の身体の真価を問い直すことができるだろう。

1980年代になると、アメリカの人類学では、ICTを対象に人間と機械とが相互に影響しあう状況に注目した研究が登場する。ルーシー・サッチマンは、人間社会を統治する情報システムの働きを強化することで、人間が機械を操作して安全で完成度の高いパフォーマンスを遂行できるというそれまでの認識を覆し、人間と機械の相互作用のありようは状況によって異なることを論証してきた（Suchman 1987）。

本共同研究は、サッチマンの批判的な考察に着想を得て、ICTが伝統芸能、スポーツ、研究活動の保存や記録に一定の役割を果たしている一方で、保存・記録することに伴う標準化や商業化、グローバル化に対する人びとの葛藤や軋轢と向きあう実践を考察してきた。過去8回にわたる研究会では、テクノロジーに関わる研究発表を通して、それが研究者にとってどのような理論的問題であるのかを議論するだけでなく、実際にテクノロジーを利用する現場でどのような問題が生じているのかを議論し、身体技法論の更新を試みた。

定量化の可能性／不可能性から考える身体と感情の関係

本共同研究では、とくにICTが身体技法の伝達や継承にどう関わるか、また、身体的経験にどのような影響を与えているかについて検討してきた。その結果、ICTが介在することで生じる「感覚」の拡張という課題や、そもそも身体技法を記述する際の言語化に内在する言語中心主義をいかに乗り越えていくかという新たな視座も獲得できた。さらには、定量化が難しいとされる身体技法に関して「はかる（量る／測る／計る）」ことの可能性や限界が明らかとなった。

研究成果の中間報告として、共同研究のメンバーで『国立民族学博物館研究報告』の特集に取り組んだものの、それぞ

人間の塔（2011年9月18日、スペイン・カタルーニャ州、岩瀬裕子撮影）。

れの事例が多岐にわたっていたため共同研究全体をまとめる枠組みの設定が十分にできず、研究期間中は全体としての研究成果を挙げることができなかった。ただし、キャリア形成過程にある若手メンバーたちが本共同研究から着想を得て各自の事例に取り組み、『国立民族学博物館研究報告』の論文として発表したことは大きな成果だった。その一人、岩瀬裕子（東京都立大学）は、スペイン・カタルーニャの人間の塔のグループに持ち込まれる指紋認証システムを取り上げ、テクノロジーが導入されていく領域とされにくい領域について論じている。また、日比野愛子（弘前大学）は、青森県の工場生産現場を対象に身体と機械の相互行為論を展開し、工場の組織化が進む中で、人間の五感に依存した手作業が再び重要になってきたことを記述している。こうした身体と機械の相互作用的な関係は変化する外部環境への一種の適応プロセスでもあり、ゆえに機械化がどれだけ進展しようとも、人間の経験的な身体感覚は工場生産の現場において機能するといえる。市野澤潤平（宮城学院女子大学）は、観光ダイビングの実践で、人間の身体能力を増強する多様なテクノロジーが活用されていることを詳細に描き出した。とくに、水中滞在時間と深度を計測して減圧症リスクを計算するダイブ・コンピューターの導入によって、ダイバーのリスク認知や身体観が変容している様相を明らかにした。

また、柳沢英輔（同志社大学）は、録音機材を利用して沖縄・南大東島の自然と人の関係性を調査し、フィールドレコーディングの成果を環境音作品として発表した。いかに高性能なマイクとレコーダーを用いても、録音した音は実際に現場で聴く生音とは異なる。録音内容を知らずに聞けば、人によってまったく異なる風景やモノをイメージする。柳沢の研究は録音テクノロジーが風景などのコンテクストやフレームを超越し、聴取者に自由な想像力を働かせることを明らかにした。

さらに代表者である平田は、身体と情動の関係性という観点から、東北タイの地域芸能者が公演依頼に関わる交渉や契約でスマートフォンを活用している事例を取り上げ、国家の社会保障制度に守られない状況下で芸能者たちが彼ら自身の芸能活動の保証システムを築いている営為をモノグラフとしてまとめ、発表する予定である。

また共同研究の期間中には、SNS やオンライン・コミュニティを活用した芸能実践をエスノグラフィとしてまとめ、刊行した。

平田 晶子（ひらた あきこ）
東洋大学アジア文化研究所客員研究員。専門は文化人類学、タイ・ラオスの芸能・宗教儀礼、技芸の所有をめぐる知財研究。論文に「イサーン文化復興の再考―文化評価制度の確立と東北タイ・モーラム芸能者の関係性」『東南アジア研究』56(2): 185-214（2019年）、「ケーンの吹奏をめぐる『男らしさ』の創成―ラオスのラム歌謡と性別役割分業の一考察」『文化人類学』82(3): 290-310（2017年）。

メンバーの参加を把握するための指紋認証システム（2017年9月17日、スペイン・カタルーニャ州、岩瀬裕子撮影）。

今後の課題

以上の通り、研究成果を振り返ってきたが、これらのいずれもが、モースによる身体技法論の研究枠組みでは触れられてこなかった、ICT をはじめとするテクノロジーの一般化という課題を各自の研究に即して論じたものである。対象とする個別社会でも、また研究者自身の活動においても、テクノロジーの活用は、もはや避けては通れない。こうした状況を前に、今後はテクノロジーの一般化によって、個別社会の人びとの振る舞いにどのような変化が表れるのか、さらには社会的な意味づけがいかに再編されていくのかといった実践的な問題を取り上げる必要がある。そして、科学技術との共生の時代を生き抜く人びとの営為を記述することを通して、ICT との共存社会における身体技法論に新たな知見を提供していくことが課題である。

引用文献

モース，M 1976『社会学と人類 2 』有路亨・山口俊夫訳，東京：弘文堂。
Brynjolfsson, E. and A. McAfee 2011 *Race Against the Machine: How the Digital Revolution is Accelerating Innovation, Driving Productivity, and Irreversibly Transforming Employment and the Economy.* Lexington, MA: Digital Frontier Press.
Leroi-Gourhan, A. 1964 *Le Geste et la Parole-tome1.* Paris: Albin Michel.
Suchman, L. A. 1987 *Plans and Situated Actions: The Problem of Human-Machine Communication.* Cambridge: Cambridge University Press.